

TO GIRE
戸切遺跡 1

—戸切遺跡群第2次調査報告—

2008

福岡市教育委員会

TO GIRE
戸切遺跡 1

福岡市埋蔵文化財調査報告書第980集



調査番号 0605
調査略号 TGR-2

2008

福岡市教育委員会

序

福岡市西郊の早良平野は、平野を北流して博多湾に注ぐ室見川の流域を中心として旧石器時代から近世までの多くの遺跡が営まれ、豊かな自然と多くの遺跡が残された地城です。

福岡市ではまちづくりの目標としての都市像に、自然を生かす快適な生活の都市、また海と歴史を抱いた文化の都市を掲げその実現にむけ邁進しています。

しかし快適な都市づくりをめざす一方で、これにともなって消滅していく遺跡も多く、本市ではこれら開発によって、やむなく失われる遺跡の記録保存調査を行なっています。

本書は、西区戸切3丁目において、平成18年度に発掘調査を行なった戸切遺跡群第2次調査の成果報告をするものです。

調査の結果、古墳時代後期を中心とする遺物・遺構が検出され、古墳時代後期の集落が広がっていることなどがわかりました。

本報告書が市民の皆様の文化財に対する認識とご理解につながり、また、学術の分野に貢献することができましたならば幸甚に存じます。

最後になりましたが、本報告書の作成にいたるまで多大なご協力を頂いた建築局および地元関係者の方々に対し、心よりの感謝の意を表する次第です。

平成20年3月31日

福岡市教育委員会
教育長 山田 裕嗣

例　　言

1. 本書は本市建築局住宅部建替整備課が実施した西区戸切3丁目18番において市営住宅戸切第1住宅建替事業にともなう事前調査として、福岡市教育委員会埋蔵文化財第2課が平成18年度に実施した戸切遺跡群第2次調査の調査報告書である。
2. 本書で用いる方位は磁北で、真北はこれに6°21'東偏する。
3. 調査区は予定建物を基軸として任意の3m方眼グリッドを設定し、グリッド呼称は北西交点とした。
4. 時期比定には小田富士雄須恵器編年を用いた。
5. 遺構の呼称は略号化し、据立柱建物→SB・土廣→SK・溝→SD・柱穴→SPとした。
6. 本書に使用した遺構実測図は加藤良彦・川嶋京子による。
7. 本書に使用した遺物実測図は加藤・平川敬治・井上加代子による。
8. 製図は井上加代子による。
9. 本書に用いた写真は加藤による。
10. 本書の執筆・編集は加藤が行った。
11. 本書にかかる記録類・遺物は福岡市埋蔵文化財センターに収蔵管理されるので活用されたい。

本文目次

I.	はじめに	1
1.	調査に至る経緯	1
2.	調査の組織	1
II.	調査区の立地と環境	2
III.	調査の記録	9
1.	調査の概要	9
2.	縄文・弥生時代の調査	10
3.	古墳時代の調査	11
IV.	小結	17

挿図目次

Fig.1	早良平野古墳時代集落遺跡分布図 (1/30,000)	3
Fig.2	調査区位置図 (1/4,000)	4
Fig.3	調査区周辺測量図 (1/500)	5
Fig.4	遺構全体図 (1/200)	6
Fig.5	縄文時代出土遺物実測図 (1/3・3・5～7-2/3・4-1/2)	10
Fig.6	SD03・06・13・15～18 断面図 (1/40)	11
Fig.7	SD03・06・15・17 出土遺物実測図 (1/3)	13
Fig.8	SB01～05 実測図 (1/100)	14
Fig.9	掘立柱建物・柱穴出土遺物実測図 (1/3)	15
Fig.10	SK19・20・22・24・28 実測図 (1/40)	16
Fig.11	SK20・22・24・排土出土遺物実測図 (1/3)	17

写 真 目 次

Ph. 1	調査区遠景(南から)	7
Ph. 2	1 区全景(西から)	7
Ph. 3	2 区全景(北から)	8
Ph. 4	2 区全景(西から)	8
Ph. 5	1 区北壁土層断面(南から)	9
Ph. 6	1 区東壁(SD13)土層断面(西から)	9
Ph. 7	縄文・弥生時代出土遺物	10
Ph. 8	SD06 土層断面(東から)	12
Ph. 9	SD26・27(東から)	12
Ph.10	SD16・18 土層断面(南から)	12
Ph.11	SD16(南東から)	12
Ph.12	SD18(南から)	12
Ph.13	SD17(南から)	12
Ph.14	SD 出土遺物	13
Ph.15	SB01(西から)	13
Ph.16	SB02・03(西から)	14
Ph.17	SB04(西から)	14
Ph.18	SB 他柱穴出土遺物	15
Ph.19	SX21 土器出土状況(北から)	17
Ph.20	SK22(南西から)	17

I. はじめに

1. 調査に至る経緯

今回の調査は、福岡市西区戸切3丁目18番において、建築局住宅部建替整備課により、市営住宅戸切第1住宅建替事業の策定に当たって、埋蔵文化財の有無の照会のため、平成17年10月6日に事前審査願いが埋蔵文化財課に提出された事により始まる。申請面積は2,984m²、受付番号は17-1-74である。

埋蔵文化財課で確認した所、申請地が戸切遺跡群の範囲内であり、遺跡の内容など状況を把握するため平成18年2月23日確認調査を実施し、結果、古墳時代の土壙・溝・柱穴を検出した。

本課では設計変更等での現況での保存が可能か申請者と協議を重ねたが、結果として、保存は困難と判断、遺跡の破壊を伴う建物部分に限定して事前の発掘調査を実施する事となった。

発掘調査は平成18年4月6日に着手、同年5月31日に全ての行程を終了した。

調査番号	0605	遺跡略号	TGR-2
調査地地籍	西区戸切3丁目18番	分布地図番号	92(戸切) 0402
開発面積	2,984m ²	調査実施面積	592.5m ²
調査期間	060406~060531	事前審査番号	17-1-74

2. 調査の組織

【調査委託】建築局住宅部建替整備課

【調査主体】福岡市教育委員会 教育長 植木とみ子(当時)

【調査総括】文化財部長 山崎純男(当時) 埋蔵文化財第2課長 力武卓治

調査第1係長 池崎謙二(当時)

【調査庶務】文化財管理課 後藤泰子(当時)

【発掘調査】加藤良彦

【発掘作業】芦馬光夫 橋口スマ子 川嶋京子 松尾和子 柴藤清志 西納富士夫 青木和代

青木真孝 佐藤直利 三村悦子 染井美保子

【整理作業】木村厚子 国武真理子 南里三佳 竹田幸子 平川泰世

II. 調査区の立地と環境

福岡市域は西から、背振山系から北流する諸河川流域である糸島・早良・福岡平野、犬鳴山地から北西に流れる諸河川流域である柏原平野が主要な部分を占め、これらが博多湾を囲むように広がっている。

戸切遺跡群が位置する早良平野は、西側を背振主稜から北に派生した西山・飯盛・高祖地壘山地に、東を同じく北に派生する袖山山地と更に北に延びる嚴君台地によって画され、中央部を背振山地を源流とする室見川が北流し博多湾へと注いでいる。平野の北辺には姪浜をはじめとする第三紀層の小丘陵群が散在し、これらを繋ぐように砂丘が形成され、後背には沖積低地が広がっている。また両山地の山麓部や平野中央部には中位段丘下位砂礫面が残され、小田部台地にはこの上位の火山灰層が残存している。低位段丘の多くは室見川の扇状地平野・三角州平野部に埋没している。

戸切遺跡群は室見川中流域左岸で、名柄川・十郎川の冲積低地間、これらに開拓された低位段丘砂礫台地の残丘上に立地する。標高は9~14mである。

周辺の沖積低地部では夜臼式単純期から弥生時代初頭の初期農耕期の遺跡が多く、室見川右岸に有田遺跡、有田七田前遺跡・免遺跡・次郎丸遺跡、左岸では橋本一丁田遺跡・牟多田遺跡・拾六町平田遺跡・拾六町ツイジ遺跡・石丸古川遺跡・湯納遺跡が分布し、有田七田前遺跡では多量の夜臼式期の遺物が、有田遺跡では台地上に弥生時代初頭の環溝集落が、免遺跡では平野内で最古期級の尖突文期の土器が多量に出土し、橋本一丁田遺跡では夜臼式単純期~弥生時代初頭の河川から土器・木製農具等が多く、拾六町ツイジ遺跡では弥生時代初頭の土器から木製農具等が、拾六町平田遺跡では家形土製品が出土している。

また、今回の調査に関連して、早良平野内での古墳時代集落遺跡は、平野低地・低位段丘部に1. 本遺跡群・2. 湯納・3. 拾六町ツイジ・4. 四箇・5. 原遺跡・6. 田村遺跡・7. 免遺跡・8. 次郎丸高石遺跡・重留村下遺跡が、海岸砂丘上に9. 生ノ松原遺跡・10. 西新町遺跡・室見川中流域左岸の山麓部から広がる標高22~54m程の中位段丘上・浸食された中位段丘下位面残丘の台地上に17. 吉武遺跡群や、11. 野方中原遺跡・12. 野方久保遺跡・13. 羽根戸遺跡・14. 太田遺跡・15. 広石C遺跡・16. 都地遺跡・金武城田遺跡・浦江遺跡群・浦江谷遺跡群が、右岸の段丘や同じく下位面残丘の台地・独立丘上に20. 有田遺跡・21. 飯倉遺跡群・22. 野芥遺跡群・梅林遺跡・東入部遺跡群が分布し、上流域には集落は展開しない(Fig.1)。

このうち、湯納・拾六町ツイジ・四箇・免遺跡で井堰や大量の木器が検出され、西新町遺跡では前期初頭の住居群から多量の半島系土器が出土し、野方中原遺跡では100軒を超す竪穴住居群が、同じく大集落の野方久保遺跡・広石C遺跡では7世紀代の大型建物群を検出、金武城田遺跡では大壁建物と大型建物群を、有田遺跡では「那津官家」と考えられる6世紀代の櫓列と大型建物群、次郎丸高石遺跡では5世紀代の河川から祭祀土器とともに多量の銀治津を、梅林遺跡ではオンドル構造の竈を持つ竪穴住居群と大壁建物を検出しており、早良平野では半島との関わりを示す遺跡が特徴的である。また、重留遺跡東側丘陵上の重留古墳C群の調査ではⅡ期の須恵器登窯が1基検出され、本遺跡出土品を焼成している可能性がある。

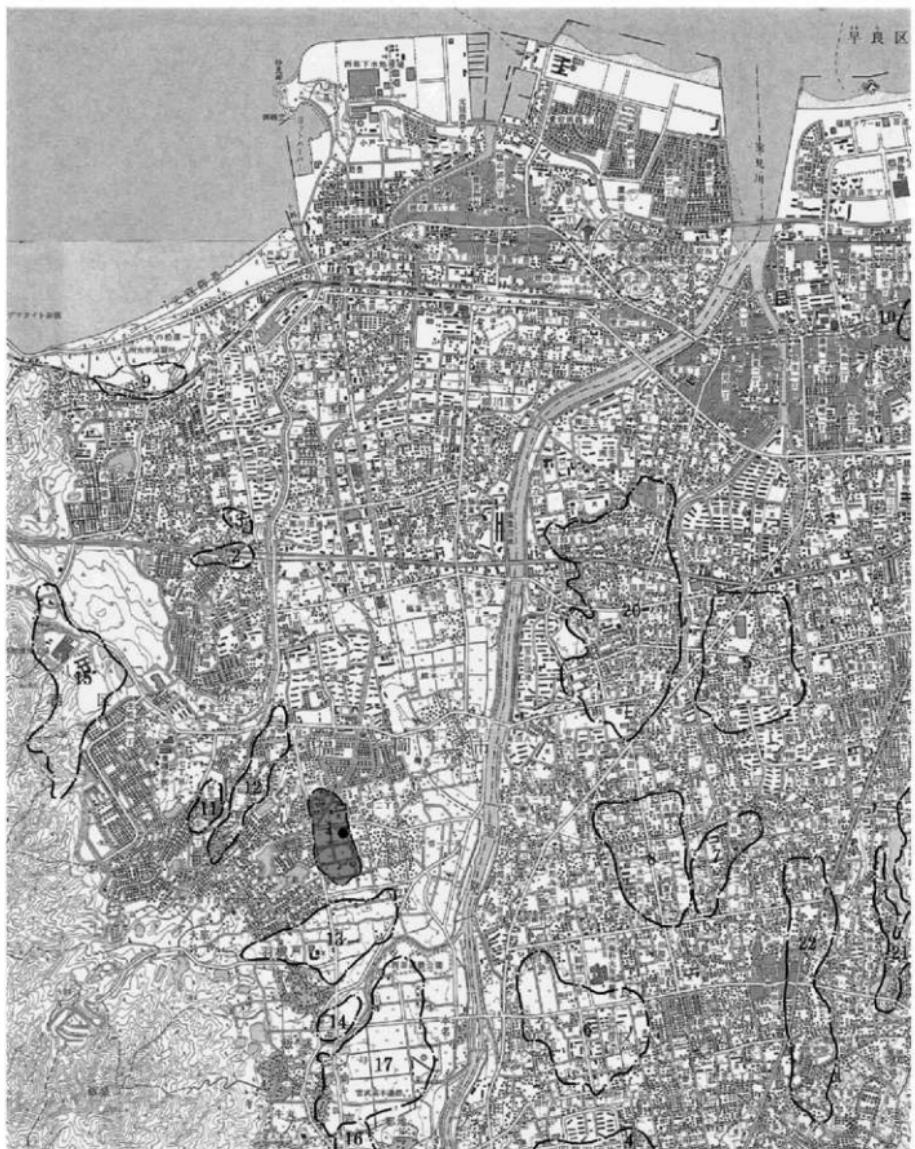


Fig.1 早良平野古墳時代集落遺跡分布図(1/30,000)



Fig.2 調査区位置図 (1/4,000)

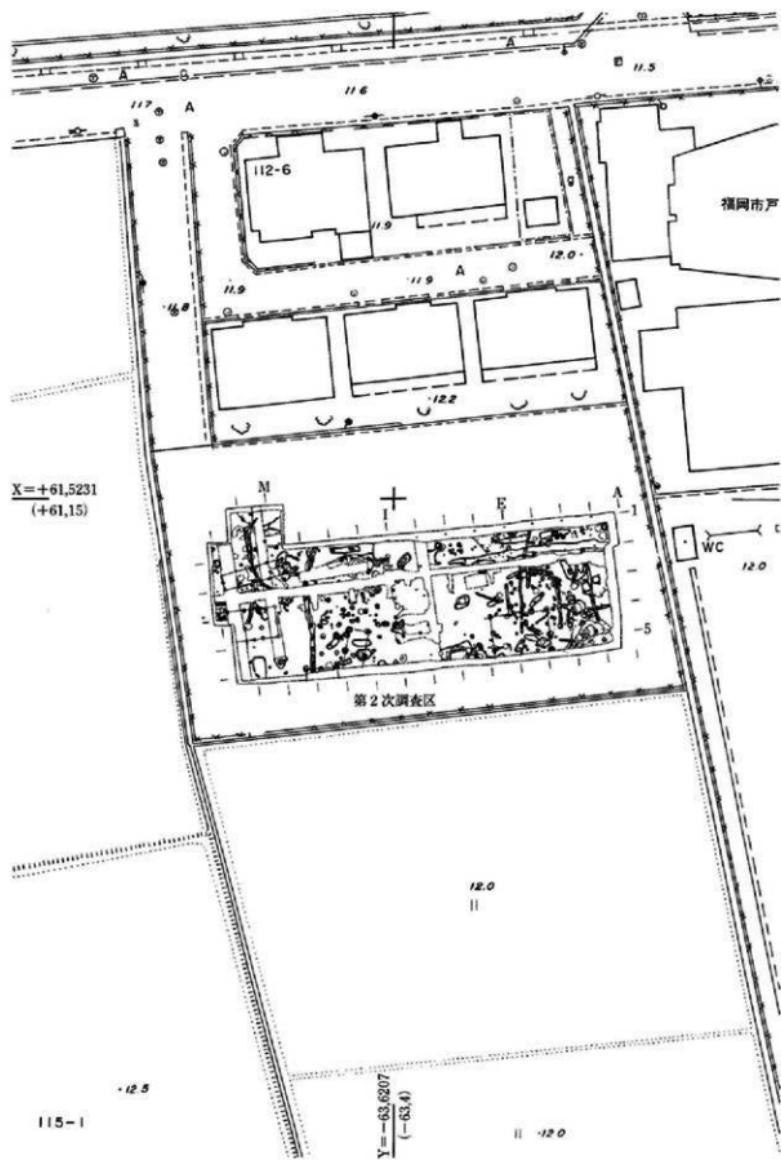


Fig.3 調査区周辺測量図(1/500)

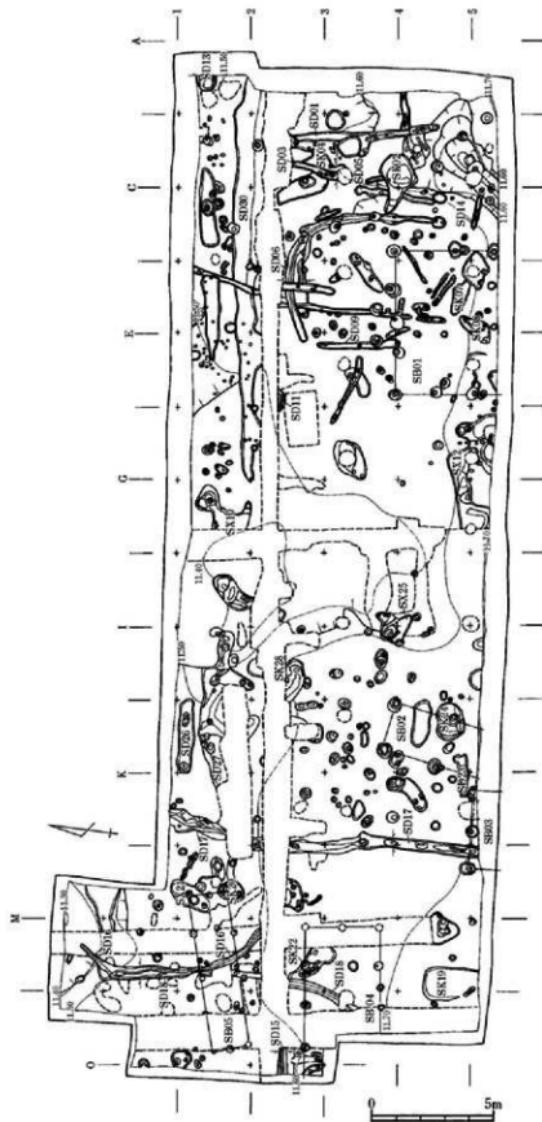
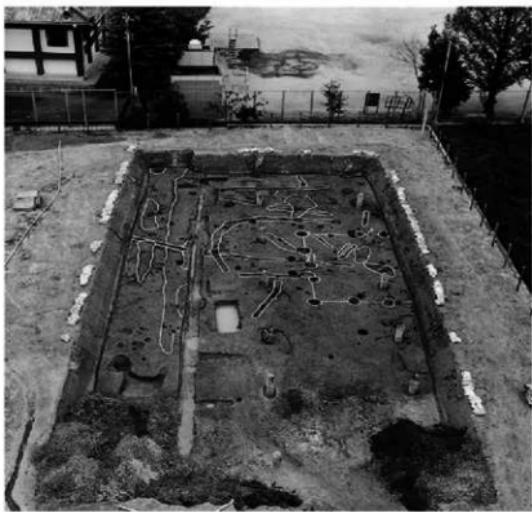


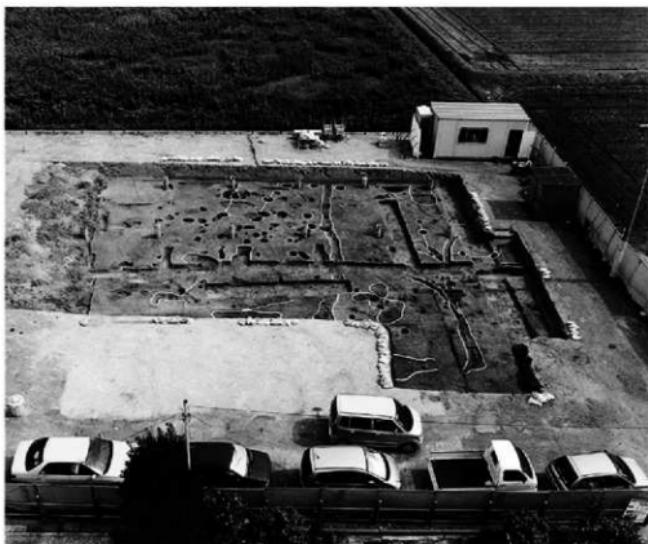
Fig.4 造構全体図 (1/200)



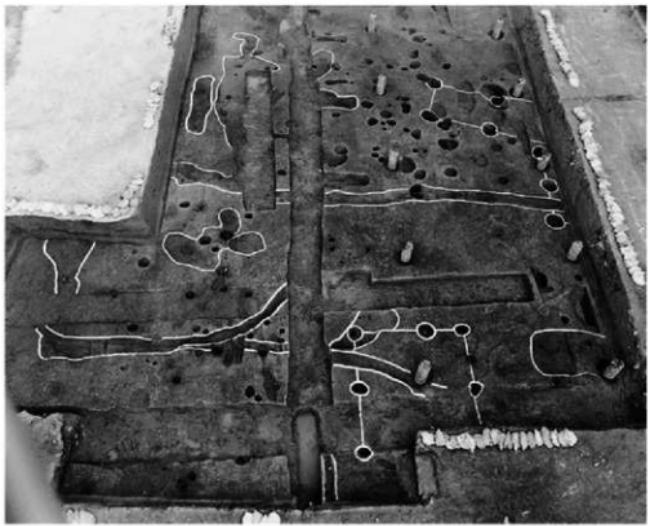
Ph. 1 調査区遠景(南から)



Ph. 2 1区全景(西から)



Ph.3 2区全景(北から)



Ph.4 2区全景(西から)

III. 調査区の記録

1. 調査の概要

戸切遺跡群は福岡市西部に位置する早良平野の中央部、室見川中流左岸の低位段丘砂礫台地の残丘上に立地する。調査区は遺跡群の中央東寄りに位置する。遺跡の東側には兵庫遺跡(2845)・戸切巡り町遺跡(0403)・上籠遺跡(2844)が連なり、平成19年度市道改良工事に伴ってこれらの調査が実施され、兵庫遺跡では弥生前期末～中期初頭の壁立ちの小型方形住居群と木器水漬け土壙群が検出されている。西側には道隈遺跡・羽根戸原B・C遺跡が連なる(Fig.2)。

遺跡群内では、32年前、本調査区より北北東60m程の壹岐南小学校建設に伴う第1次調査が実施されているのみで(Fig.2)、1,836 m²の面積で、縄文・弥生時代の石斧・石鎌・石包丁、古墳時代後期の竪穴住居2軒・不整形土壙5基・溝、歴史時代総柱建物2棟が検出され、須恵器・土師器・木器・青磁・土馬等が出土している。

今回の発掘調査は、試掘調査の予見では予定建物北東隅・北西隅の2箇所、計190 m²の台地上を調査対象としていたため、東を1区・西を2区として排土を反転して実施する段取りで4月6日より1区の重機による表土剥ぎに着手した。表土下約1mの遺構面を検出し広げたが予定範囲を超えて台地下の河川堆積に至らず、結局予定建物全域に遺構面が広がった。旧市営住宅ガス埋設管の埋砂を河川堆積と誤認した結果と思われ、これが調査区内を大きく搅乱している。12日より作業員12名を導入し遺構検出を開始し、26日に予定建物東半部の1区全景を撮影。測量・実測を完了し、5月8日より重機による排土反転を開始し予定建物西端より2区の表土剥ぎを開始。同様に予定建物全域に遺構面が広がり、結果調査面積は592.5 m²となった。今期は雨天が多く度々全面が水没したが、29日に予定建物西半部の2区全景を撮影。測量・実測を完了し、30日に重機による埋め戻し・調査機材を撤収。31日にユニットハウスを撤去し調査を完了した。

遺構は地表下約1mの、客土・耕作土(A～C層)・暗褐色混粗砂土包含層(1層)下の明黄褐色～淡黄緑色シルト～混土粗砂礫(3・4層)の上面で検出される(Fig.6 Ph.5・6)。検出面の標高は11.5 mで、検出した遺構は、古墳時代後期の土壙9基・溝16条・掘立柱建物5棟ほか柱穴多数である。中央に浅い鞍部があり、東西に遺構集中部が二分される。

遺物は、古墳時代ⅠB～ⅢA期の須恵器・土師器を中心にコンテナ1箱分検出している。



Ph. 5 1区北壁土層断面(南から)

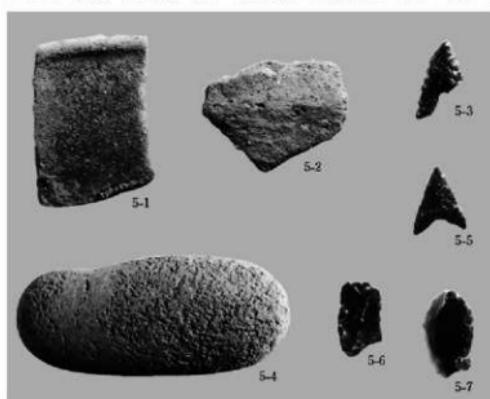


Ph. 6 1区東壁(SD13)土層断面(西から)

2. 繩文・弥生時代の調査

繩文・弥生時代の資料は、主に古墳時代の遺構・包含層に混入した状態で検出され、該期の遺構・包含層は検出されない。しかし周辺は刻目突帯文～弥生前期の遺跡が多く分布し、将来的に遺構が検出される可能性は高い。遺物は繩文晩期を主とし、若干の圓化不能な弥生土器片が検出される。

出土遺物(Fig.5 Ph.7) 1～4は遺構混入資料。1は晩期前半精製浅鉢で、口縁端部が短く内側に屈曲する。調整は不明。やや粗い石英粒を多く含み鈍い黄橙色を呈す。2は同期の粗製深鉢の屈曲肩部で、外面上位はヨコナデ下位はヨコ条痕後継いナデ。内面はナデ。粗い石英粒を多く含み外面は鈍い黄橙色内面は褐灰色を呈す。3は腰岳産黒耀石の剥片鎌。先端欠損部を主剥離側からの押圧剥離で再生する。現況で $27.3 \times 18.0 \times 3.2\text{mm}$ を測る。4は片岩扁平円錐を用いた叩石で、 $10.2 \times 4.4 \times 2.3\text{cm} \cdot 172\text{g}$ を測る。左半部が握部で両端面に細かな敲打痕が多数残り、磨りは無い。5～7は検出面他からの出土。5は腰岳産黒耀石製鎌で $22.8 \times 18.6 \times 3.9\text{mm} \cdot 1.04\text{g}$ を測る。両面からの押圧剥離で形成し主剥離左先端に欠損がある。漆黒色不透明で若干風化する。6は腰岳産黒耀石の残核で $25.5 \times 14.8 \times 9.4\text{mm}$ を測る。上下・側面に自然面を残す角錐素材で上方・側方から剥離する。側邊に使用痕が残る。漆黒色不透明で若干風化する。7は $29.7 \times 16.1 \times 10.0\text{mm}$ を測る腰岳産黒耀石の角錐の隅角を残す石核で、上・両側面に自然面を残す。上下・側方から剥離する。1側辺を使用している。風化は無い。以上後・晩期の時期を示す。



Ph.7 繩文・弥生時代出土遺物

産黒耀石製鎌で $22.8 \times 18.6 \times 3.9\text{mm} \cdot 1.04\text{g}$ を測る。両面からの押圧剥離で形成し主剥離左先端に欠損がある。漆黒色不透明で若干風化する。6は腰岳産黒耀石の残核で $25.5 \times 14.8 \times 9.4\text{mm}$ を測る。上下・側面に自然面を残す角錐素材で上方・側方から剥離する。側邊に使用痕が残る。漆黒色不透明で若干風化する。7は $29.7 \times 16.1 \times 10.0\text{mm}$ を測る腰岳産黒耀石の角錐の隅角を残す石核で、上・両側面に自然面を残す。上下・側方から剥離する。1側辺を使用している。風化は無い。以上後・晩期の時期を示す。

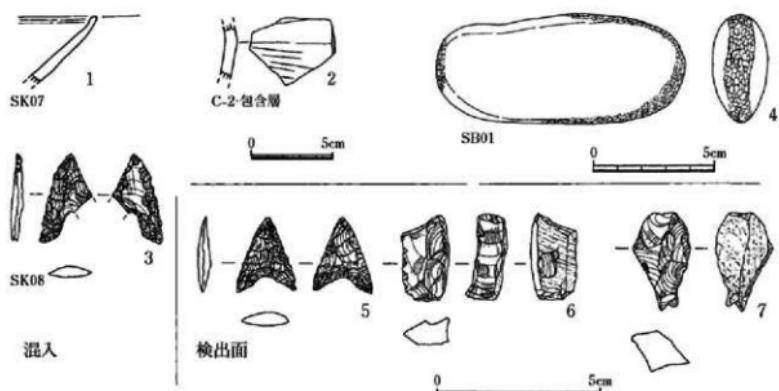


Fig.5 繩文時代出土遺物実測図(1/3・3・5～7-2/3・4-1/2)

3. 古墳時代の調査

今回の調査の中心を成す時期で、古墳時代後期の土塙9基・溝12条・掘立柱建物5棟ほか柱穴多数を検出した。調査1・2区と分けた調査区中央部は偶然に浅い鞍部となっており、ここを挟んで東西に遺構の密集部分が分かれる。

1). 溝 (SD)

溝は大小12条検出しており、I B～II期が多い。東西両側に小規模な南北方向溝が多く、北部にやや大きな並列する東西方向をとる溝が分布する。覆土は暗灰褐色混粗砂礫粘質土である。

①SD03・05 (Fig.6) 1区東部で、60cm程の間をとて南北に連なり、延べ6m幅35深さ14cmを測る小溝で、方位をN-7°-Eにとる。II期の須恵器・土師器・土製玉が出土した。

出土遺物 (Fig.7 Ph.14) 8はII期の須恵器甕胴部で外面に木目直交縦位の平行タタキ内面は同心円の当て具痕をヨコカキメで消す。暗灰色を呈す。9は土師質の土製玉で、径1.5高1.5孔径0.4cmを測る。全面ナデで浅黄橙色を呈す。

②SD06 (Fig.6 Ph.8) 掘立柱建物SB01の北東4m程にこれを囲う様に矩形に屈曲する小溝で、東西約5m・南北約6m幅80深さ11cm、底面に暗褐色粘質土が堆積する。方位を南北でN-6°-Wにとり、後期の坏・甕・瓶・ミニチュア土器等が出土する。

出土遺物 (Fig.7 Ph.14) 10は土師器のミニチュア土器で口径3.6器高2.4cmを測る。内外面をナデ、指頭圧痕が多く残る。粗い石英粒を含み鈍い橙色を呈す。

③SD13・27・26・30 (Fig.6 Ph.9) 調査区北部の東西方向にSD13～27と途切れながら連なり、延べ29m幅85深さ31cmを測る調査区内では最大級の溝で、方位をN-82°-Eにとる。II期の須恵器・土師器が出土した。南北1.2・1.5mには並行するSD26・30があり、SD30とは南北の小溝を介してこれに後出する事がわかり、SD26はIII期の遺物からSD27に後出する。

④SD15 (Fig.6) 2区西端部に位置する東西方向の小溝で掘立柱建物SB04の北隣落ちの位置にある。延べ1.1m幅25深さ12cmを測り、方位をN-82°-Eにとる。後期の土師器甕が出土した。

出土遺物 (Fig.7) 11は土師器甕で口唇が尖り緩く外反する。粗い石英粒を多く含み鈍い黄橙色。

⑤SD16・18 (Fig.6 Ph.10～12) 2区西部で、南北方向にSD16は西に、SD18は東に緩い弧を描いて北端でSD16が重なる。掘立柱建物SB04・05と切り合う。SD16で延べ7.5m幅55深さ11cmを、SD18で延べ9.35m幅40深さ14cmを測る。後期の土師器甕・ミニチュア土器が出土している。

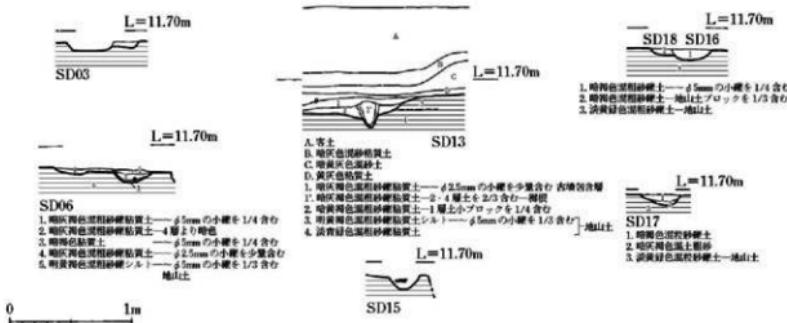


Fig.6 SD03・06・13・15～18 断面図 (1/40)

⑥SD17(Fig.6 Ph.13) 2区西寄りの南北方向の溝で掘立柱建物SB03と切り合う。延べ12.8m幅95深さ21cmを測り、方位0°。I B～II期の須恵器・土師器・弥生土器が出土した。

出土遺物(Fig.7 Ph.14) 12は須恵器壺で口径16cm。外面中央の低い複合突堤上下に櫛搔波状文を施す。暗灰色を呈し内面に自然釉がかかる。



Ph.8 SD06 土層断面(東から)



Ph.9 SD26・27(東から)



Ph.10 SD16・18 土層断面(南から)



Ph.11 SD16(南東から)



Ph.12 SD18(南から)



Ph.13 SD17(南から)

2). 捩立柱建物(SB)

擩立柱建物は5棟検出し、全て側柱建物で南北棟を探るものが多い。1区のSB01が中心となる。

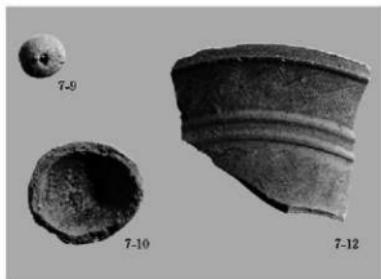
①SB01(Fig.8 Ph.15) 1区中央南に位置する 4×3 間 + α 5.88×4.05 m + α の建物で、棟をN-8°-Wにとり柱間は梁間1.3~1.7桁行1.35~1.6mと等しい。堀方は円形で大きく径35~60深さ24~50cmを測る。柱径は25cm程。遺物は須恵器・土師器小片・焼土塊等が出土する。

出土遺物(Fig.9 Ph.18) 13は須恵器壺で口唇内側に凹線を施し口縁外面突帯上下に櫛描波状文を施す。暗灰色を呈す。14は須恵器杯で口径12cm。受部が立ち上がり口唇内面に段を成す。明灰色を呈す。15は土師器壺。内外にナデ。橙色を呈す。16は焼土塊。円盤形の断片でスサを含む。II期。

②SB02(Fig.8 Ph.16) 2区東寄りに位置する 1×1 間 + α 2.0×3.8 m + α の建物で、梁をN-13°-Eにとり柱間は梁間2.0桁行2.3mと桁行が長い。堀方は円形で大きく径50~65深さ32~55cmを測る。柱径は25cm程。遺物は須恵器・土師器小片が出土する。

出土遺物(Fig.9 Ph.18) 17は須恵器壺蓋で口径15.6cm。口唇内面と外面底部境が段を成し、天井部に回転ヘラケズリを施す。灰色を呈す。III A期。

③SB03(Fig.8 Ph.16) 2区中央南に位置する 2×1 間 + α 3.15×0.8 m + α の建物で、棟をN-85°-Eにとる。柱間は1.5~1.7mを測り、堀方は円形で径56~62深さ35~40cmを測る。柱径は25cm程。遺物は後期の土師器小片が出土する。



Ph.14 SD 出土遺物



Ph.15 SB01 (西から)

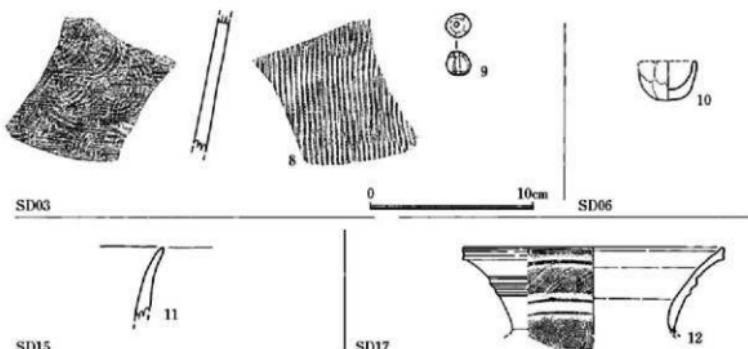
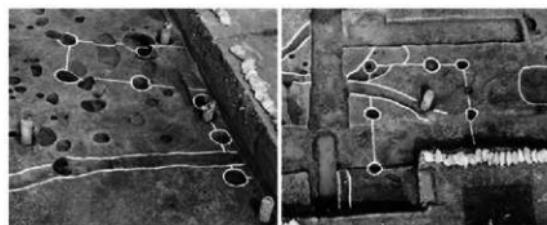


Fig.7 SD03・06・15・17 出土遺物実測図 (1/3)



Ph.16 SB02・03 (西から)

Ph.17 SB04(西から)

④SB04 (Fig.8 Ph.17) 2
区西端に位置する 2×3 間+
 α $3.1 \times 6.45m + \alpha$ の東西棟
で、東端を搅乱で切られる。
棟をN-83°-Eにとり柱間は
1.65~1.7mを測る。堀方は
円形で小さく径25~35深さ
24~45cmを測る。遺物は後
期土師器小片が出土。

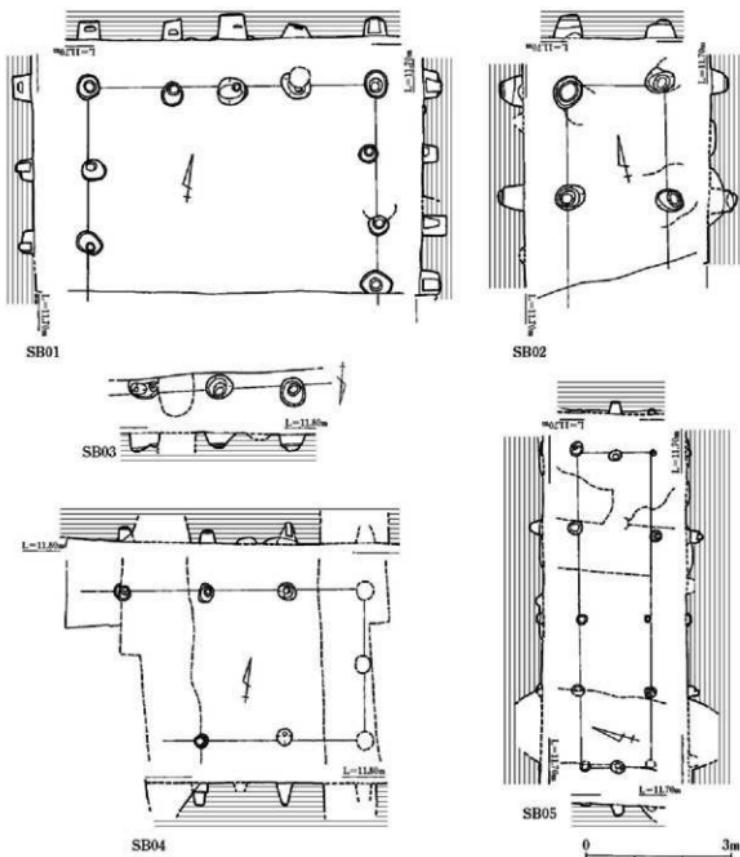
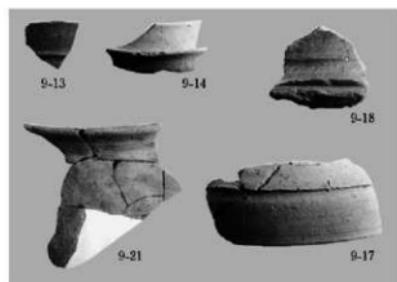


Fig.8 SB01 ~ 05 実測図 (1/100)

⑤SB05 (Fig.8) SB04北2.5m程に位置する2×4間1.45×6.4mの東西棟で、整理時に確認した。棟をN-74°-Eにとり柱間は梁間0.7桁行1.4~1.8mと倍近い。壠方は円形で小さく径18~30深さ4~30cmを測る。掘方の大きさから中世の可能性もある。遺物は須恵器・土師器小片が出土。

⑥柱穴出土遺物 (Fig.9 Ph.18) 18~21は柱穴出土。18は須恵器高环脚。上下に肥厚した端部上にカキメを施す。石英粒を多く含み暗灰色を呈す。19は土師器壠。12.4cm。調整不明。橙色を呈す。20は軟質壺胴部片。外面に木目直交平行タタキ、内面に平行当て具痕を残す。赤橙色を呈す。21は土師器壺。口径23.6cm。口縁内外と胴外面にナデ内面頸部下にケズリを施す。



4). 土壙(SK)

土壤は1区で南東部に、2区で微高地の縁に沿うように9基検出した。全て古墳後期である。

①SK19 (Fig.10) 2区南西に位置し、平面圓丸形 $2.22+\alpha \times 1.35$ m深さ9cmを測る。土師器壠小片が出土した。

②SK20・SX21 (Fig.10 Ph.19) 2区北東に位置し、SB05に切られる。SK20は不整形土壙21の一部で平面方圓形 1.08×0.8 m深さ8cmを測る。II期の須恵器・土師器小片が出土。SX21は

Ph.18 SB 他柱穴出土遺物

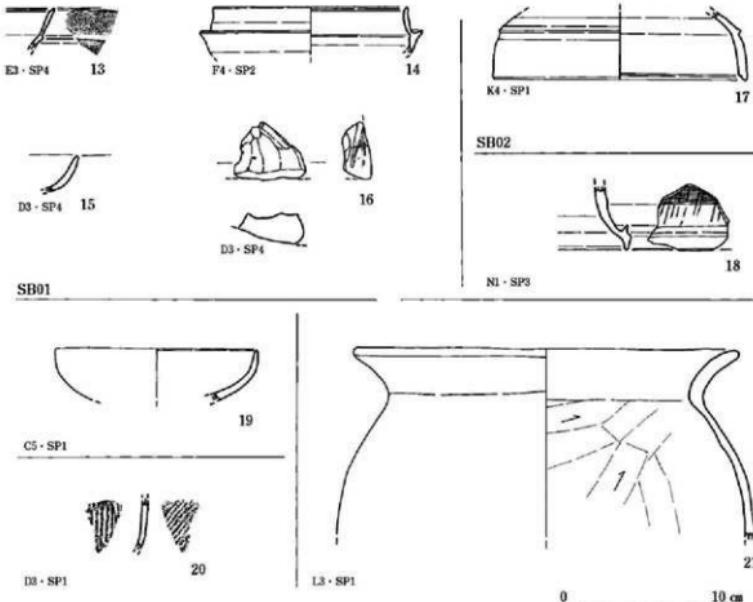


Fig.9 掘立柱建物・柱穴出土遺物実測図(1/3)

2.4×2.6m深さ12cmの不整形土壌で南部に口縁の欠けた土師器甕が出土した。

出土遺物(Fig.11) 22は須恵器坏蓋で口径12cm。口縁内面が段を、体部境が低い稜を成す。

③SK22(Fig.10 Ph.20) 2区中央西より位置し、SB04に切られる。溝状で $1.6 + \alpha \times 1.0$ m深さ13cmを測る。底面から10cm程浮いて後期の土師器甕2個个体が潰れて出土した。

出土遺物(Fig.11) 23は平底に近い土師器甕。底径15.6cm。外面は指頭圧後ナデ。被熱する。内面は指頭圧後ヨコケズリ。外面底部は鈍い黄橙色体部は鈍い橙色を呈す。

④SK24(Fig.10) 2区南東部に位置しSB02に切られる。梢円形で 1.58×1.15 m深さ36cmを測る。

出土遺物(Fig.11) 24は口径11cmの土師器坏。内外をナデ。橙色を呈す。25は土師器甕。

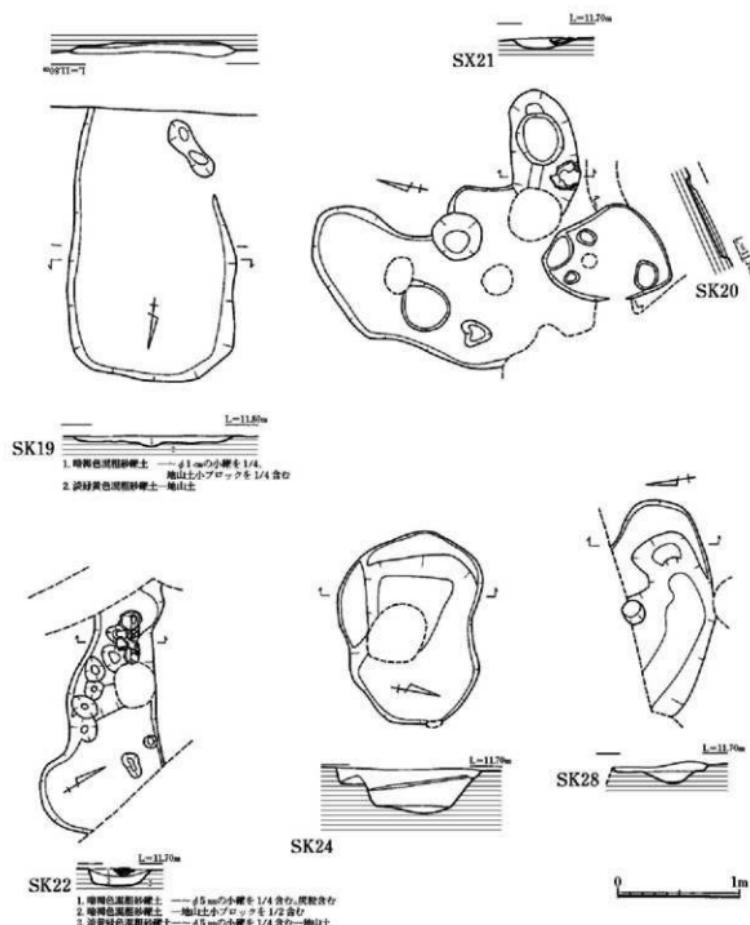


Fig.10 SK19・20・22・24・28 実測図(1/40)

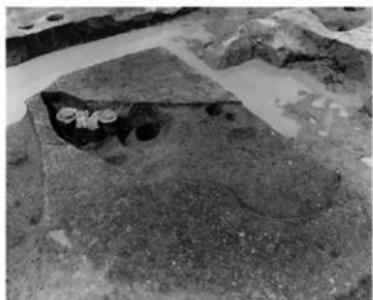
⑤SK28(Fig.10) 2区東部に位置し、北半分を擾乱に切られる。梢円形で $1.6 \times 0.8 + \alpha$ m深さ23cmを測る。土師器甕・壺の小片が出土した。

IV. 小結

今回の調査では、6世紀前後～6世紀前半にかけての古墳時代後期の土塙9基・溝16条・掘立柱建物5棟ほか柱穴多数を検出した。遺構は調査区東西両側にまとまり、中央に幅5m程の低地が広がる。溝は幅1m弱の小溝で、磁北に近いものが多く、また、掘立柱建物5棟のうち3棟はN-5°～8°-Wにとり、該地の条理の方向に近い。遺跡群は古代平群郷の比定地にあたり、遺物の出土は無かったものの、遺構の幾つかは古代に属する可能性も捨てきれない。本調査区での居住遺構は、竪穴住居が検出されず、掘立柱建物のみの検出であったが、杏岐南小学校の建設に先立つ第1次調査では古墳時代後期の竪穴住居2軒が検出される。北部に竪穴住居群・南部に建物群と分布域を分けている可能性があり、薄いながら古墳時代後期の集落が広範囲に広がるものと考えられる。吉武遺跡群第9次調査区でもI・II期は西部に竪穴住居群、東部に掘立柱建物群と分かれて分布する傾向にある。



Ph.19 SX21 土器出土状況(北から)



Ph.20 SK22(南西から)

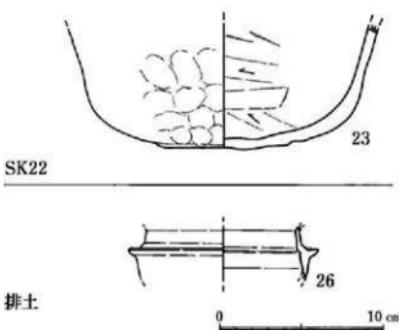
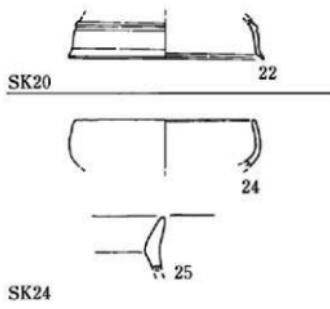


Fig.11 SK20・22・24・排土出土遺物実測図(1/3)

Tab.1 遺構一覧表

遺構番号	時期	規模 幅×奥行き(m)		主な出土遺物	備考	確認番号	実測番号
		幅	奥行き				
SD001	古墳後期	0.95×0.12		土師器(高环・甕)			
SD003	II	0.35×0.14		須恵器(甕)・土師器(环・甕)・土鏡	SD05と一連・SR04を切り	6	
SD005	III	0.3×0.14		土師器(甕)	SK02に切られる		
SD006	古墳後期	0.8×0.11		土師器(环・甕・瓶・ミニチュア)・灰	SB01を区画	6	8
SD009	古墳後期	0.36×0.09		土師器(甕)	SB01とSB04合ひ		
SD11	古墳後期	0.8×0.1		土師器(环・甕)			
SD13	II	0.85×0.31		須恵器(甕)	SD27と一緒に	6	
SD14	古墳後期	0.2×0.07		土師器(甕)			
SD15	古墳後期	0.25×0.12		土師器(甕)	SB04を区画	6	
SD16	古墳後期	0.55×0.11		土師器(甕・ミニチュア)	SD18を切り SB05と切り合ひ	6	10・11
SD17	II-B	0.95×0.21		須恵器(壺・环・甕)・土師器(高环・甕)・生土器(甕・甕)	SB03と一緒に	6	13
SD18	古墳後期	0.4×0.14		土師器(甕)	SK22を切り SB04と一緒に合ひ	6	10・12
SD23	古墳後期	0.58×0.11		土師器(环・甕)	SB02と一緒に	6	
SD26	III-A	0.68×0.10		須恵器(环)・土師器(甕)	SD27に並行	9	
SD27	II	0.8×0.23		土師器(甕)	SD13に並行	9	
SD30	II-B	1.25×0.09		なし	SD14と一緒に		

遺構番号	時期	規模 幅×奥行き(m)		種別	方位	主な出土遺物	備考	確認番号	実測番号
		幅	奥行き						
SB001	II	4.8×3.4+(5.88×4.05+a)		側柱	N=6°-W	須恵器(环蓋・舟身・甕)・土師器(环・高环・甕)・焼土・砾石		8	15
SB002	III-A	1×1+a+(2.0×3.8+a)		側柱	N=13°-E	須恵器(环蓋・甕)・土師器(甕)	SK24を切り	8	16
SB003	古墳後期	2×1+a+(3.15×0.8+a)		側柱	N=65°-E	土師器(火葬・甕)		8	16
SB004	古墳後期	2×3+a+(3.1×0.45+a)		側柱	N=83°-E	土師器(环・甕)	SD18と一緒に合ひ	8	17
SB005	古墳後期	2×4+(1.45×6.4)		側柱	N=74°-E	須恵器(高环・环蓋)・土師器(环・甕)・Ob(6)	SD16・18と一緒に合ひ	8	

遺構番号	カラム	時期	規模 幅×奥行き×深さ(m)		平面形	主な出土遺物	備考	確認番号	実測番号
			幅	奥行き					
SK002	C3	古墳後期	1.6×1.73+a×0.15		不動形	土師器	SD05を切り		
SK004	C2	古墳後期	0.83×1.45+a×0.24		調状	土師器(甕)・Ob(6)			
SK007	E4	古墳後期	1.45×0.63×0.16		椎円形	土師器(甕)・陶器洗跡	SB01と一緒に合ひ		
SK008	E5	古墳後期	1.3×1.95+a×0.29		椎円形	土師器・Ob(6)	SB01と一緒に合ひ		
SK19	N4	古墳後期	1.4×0.45+a×0.50		礎丸方形	土師器(甕)			19
SK20	M1	II	4.7×2.75×0.33		方円形	須恵器(环)	SB05と一緒に合ひ	19	
SK22	N2	古墳後期	1.15×0.8+a×0.16		調状	土師器(甕)	SD18・SD04と一緒に合ひ	19	20
SK24	K4	古墳後期	1.05×0.9+a×0.21		椎円形	須恵器(环身)・土師器(环・甕)	SB02と一緒に合ひ	19	
SK26	J2	古墳後期	2.16×1.13×0.13		椎円形	土師器(环・甕)			19

報告書抄録

ふりがな	とぎれ						
書名	戸切遺跡1						
副書名	戸切遺跡群第2次調査報告						
巻次	1						
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書						
シリーズ番号	980						
編著者名	加藤良彦						
発行機関	福岡市教育委員会						
所在地	〒810-8621 福岡市中央区天神1-8-1 Tel.092-711-4667						
発行年月日	20080331						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積 (m ²)	調査原因
とぎれ 戸切遺跡群 第2次	ふくおかしにしくとぎれ 福岡市西区戸切 3丁目18番	市町村 40135	遺跡番号 0402	33° 32' 57"	130° 18' 23"	20060406 ～ 20060531	592.5 市営住宅 建替
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
戸切遺跡群	集落	古墳	掘立柱建物 溝	須恵器 土師器	6世紀前後～ 6世紀前半代の建物群		

戸切遺跡1

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第980集

2008年(平成20年)3月31日

発行 福岡市教育委員会
〒810-8621 福岡市中央区天神1-8-1
Tel.(092)711-4967

印刷 下印刷株式会社
〒812-0016 福岡市博多区博多駅南5-20-30
Tel.(092)472-4736